

第9回「孤独・孤立に関するフォーラム」



特定非営利活動法人 ビーンズふくしま
郡山事業部門
アウトリーチ事業長 山下仁子

ビーンズふくしま 設立

1999年 9 月 9 日 9° 9′ 9″

学校に行きにくさを抱えた子どもたち
のためのフリースクールを設立

ありのままの自分を認めてもらえる
「安心できる居場所」作りが必要との思いで取り組みを開始

※2003年NPO法人格取得

ビーンズふくしま Vision・Mission

【Vision】

生きにくさを抱える子ども若者が、自ら望む姿でつながることができる社会をつくる。

【Mission】

子ども若者の教育・労働・福祉との接続機会の喪失によって起こる「社会からの孤立問題」を解決する。

アウトリーチ事業目的

目的

子どもの権利保障 ～子どもの生きる力を引き出し育てる～

子どもの権利条約

～大きな4つの権利～



生きる権利

育つ権利

守られる権利

参加する権利

unicef (1989). 子どもの権利条約

「生きる力」

～アウトリーチ事業～

- ・ 自らの困りごとを認識できる
- ・ 助けを求めることができる
- ・ 危険を回避できる
- ・ 将来に希望を持つことができる

アウトリーチ事業概要等

- ◆活動経費：福島県、須賀川市からの委託事業
その他、各種助成金を活用
- ◆対象家庭：委託枠 生活困窮家庭（生活保護家庭、準要
保護家庭、ひとり親家庭）
委託外 要支援の子ども
- ◆支援形態：家庭訪問型（アウトリーチ）
- ◆対象年齢：学齢期の子どもとその保護者
（学齢期以降はフォローアップ）
- ◆対象地域：福島県県中・県南地域

アウトリーチ事業変遷

- **福島県子どもの健全育成支援事業**
(県委託 2012年度～2014年度 県中・県南地域)
- **福島県子どもの学習支援事業**
(県委託 2015年度～ 県北・相双・県中地域)
- **須賀川市生活困窮世帯子どもの学習支援事業**
(市委託 2017年度～ 須賀川市)
- **子どもの貧困対策支援事業**
(各種助成金 2015年度～ 県中・県南地域)
- **アウトリーチ事業**
(2019年度～ 名称変更：対象枠なし
各子ども支援領域、専門機関より、当該支援手法に高く評価頂く。
現在はエビデンスを基に子どもの貧困対策外にも活用。)

子どもを取り巻く社会課題

(2019~2020実数等)

不適切な性行動等による
人工中絶手術：
11,058件

不登校
181,272人
H10以降最多

性被害
児童買春：637件
児童ポルノ事犯：
2,757件

虐待や経済的理由等
による**社会的養護**
約45,000人

虐待
205,029件
前年比5.8%
(内性虐待：299件)

子どもの自殺
小学生：14人
中学生：146人
高校生：339人

少年非行検挙数：
192,607人（内刑法犯
少年数：19,914人）

子どもの貧困
13.5%
生活保護実人員：2,066,660人
(世帯：1,635,201世帯)



複雑で過酷な環境の中で生きる子どもたち

子どもの権利を侵害され、生きる力が低下した状態に陥ることもしばしば



生きる力が低下した状態の子どもに待ち受けているもの



社会に接続されない状態

孤立状態



自己肯定感の低下

自己肯定感が低下した子どもたちからの発信

みんなにはわからないだろうけど、こんな家でもこんな家族でも、私は幸せだった。だから生まれ変わったらまた、この家族として生まれてきたい。
サヨナラ。

将来に夢をみることはやめました。
だから生きていていいのかわからない。

生きているとみんなに迷惑かけるから今から死のうと思う。
でも、母親を1人にはできないから
母親も殺すしかない。

何のために生きているのかわからない。
2分に1回死にたくなっちゃう。
助けて・・・

どうせ私なんて生きてる価値なんかない人間だから
もう疲れた・・・

この先、生きてても
幸せになんてなれない・・・

今まで頑張ってきたけど、これ以上何を
どう頑張ればいいのかわからない。
生まれてきたのが間違いだったんだよ。

誰でもいいから殺したい。
止められない。
自分が怖い。助けて。

自己肯定感の醸成から自立へのプロセス

ありのままの子どもの状態を全てひっくるめて受け止める



子どもの自己肯定感が醸成される



子どもが自分の困り感を認識し、違和感を持つようになる



自分の言葉で気持ちを伝えてくれるようになる



周りに助けを求めたり、他者との関わりを求めるようになる = 孤立からの脱却



他者との関わりが可能になると、多様な学びが経験できる機会が増える



権利侵害から回復し、自己決定する力、自立へ向かう力が育まれる

実際の支援手法

家庭訪問による 直接支援

学習・生活・健全育成支援、
面談、性教育講座・食育講座
等の各種講座など



子どもの権利保障を目的 とした間接支援 (ソーシャルワーク)

情報提供機能、代弁・代行機
能、**パーソナルサポート機能**、
ノウハウの移管など



子ども同士の交流・ ストレスケアを 目的とした集合型活動

キャンプ、バーベキュー、
スポーツ、クリスマス会など



子どもソーシャルワーク機能

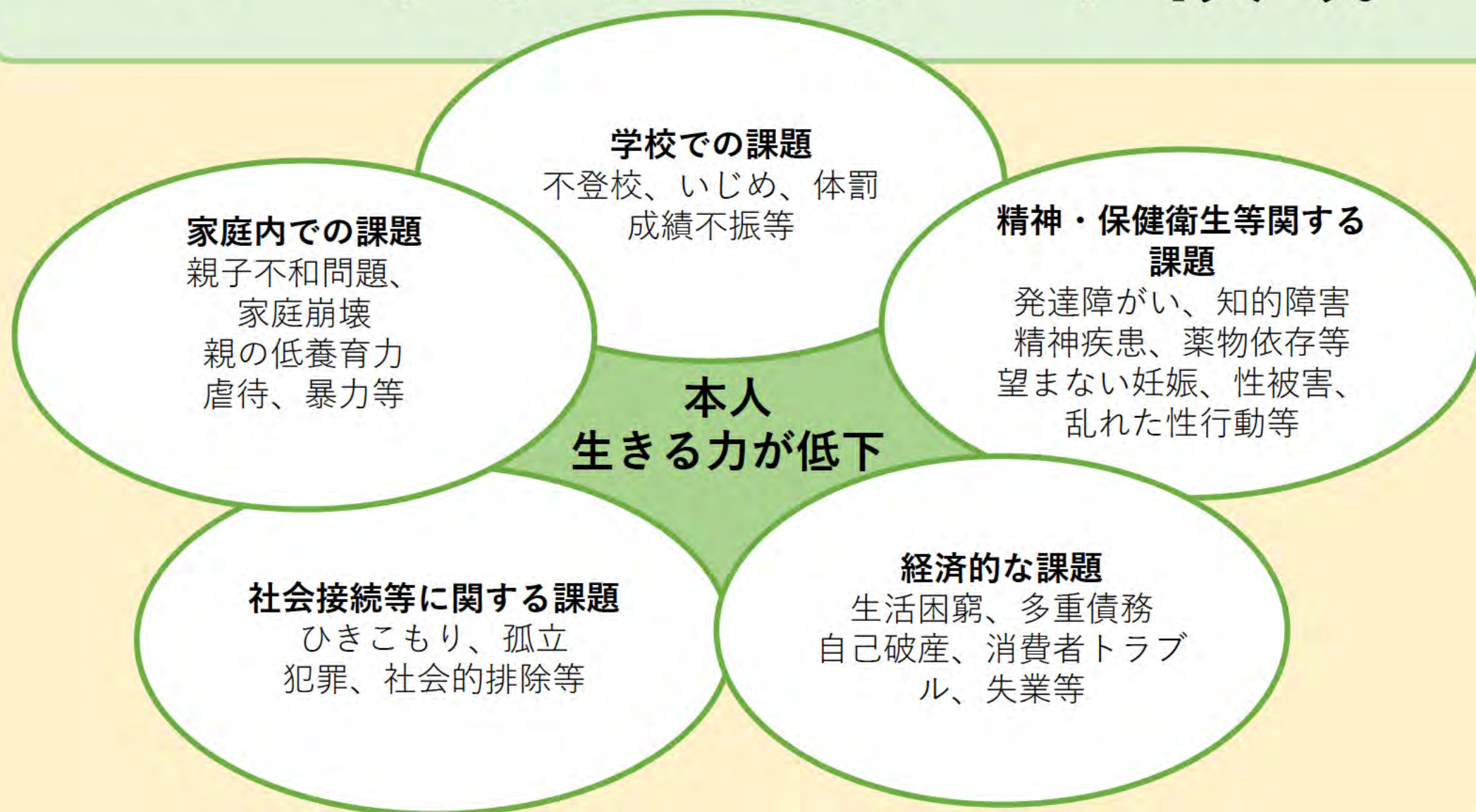


パーソナルサポート機能

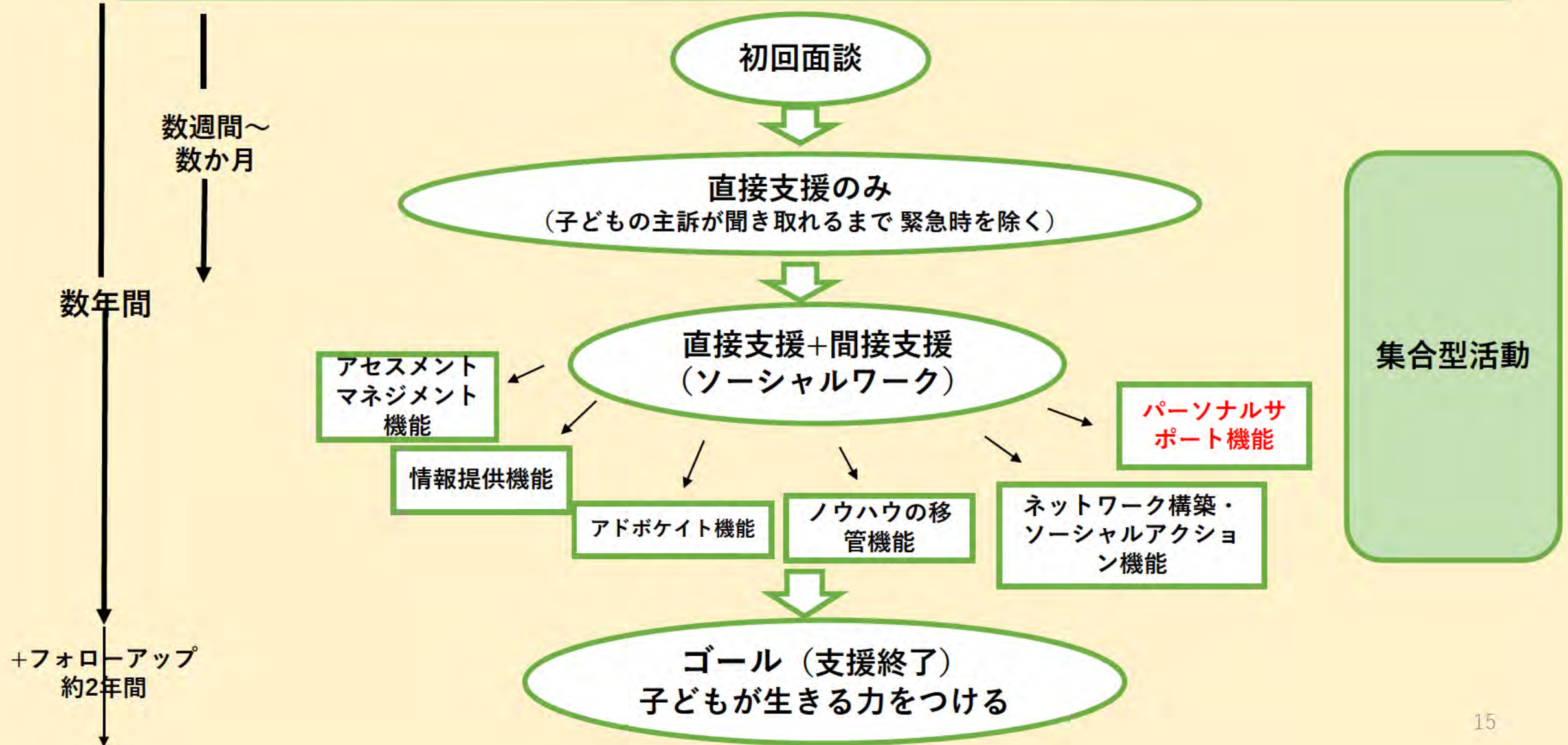
- ◆複雑に絡み合った子どもの課題の全体を受け止める
- ◆特定領域の支援やコーディネートのみではなく対象者が必要とする支援を提供する
- ◆子どもの権利を最大限保障し、子どもがどのような状態になろうとも寄り添い続ける
- ◆各領域のマインドを把握し、目標や情報を共有する
- ◆適宜、カンファレンスを実施し、支援効果を評価する
- ◆アセスマネジメントを継続的に実施し、適切な支援提供に努める
- ◆エンパワメントの視点を持ち、子どもの自立まで伴走し続ける

※内閣府パーソナルサポートサービスを参考に作成

パーソナルサポート領域



アウトリーチ支援フロー



アウトリーチ事業からのお知らせ

ノウハウ本の配布

アウトリーチ支援に関する
ノウハウをまとめた本を
無料で配布しております。
ご希望の方は、右下の
連絡先までご連絡ください。
(内閣府のHPで紹介されました！)



アウトリーチ事業
Instagram



連絡先

住 所 〒963-8022
郡山市西ノ内 1丁目 21-4 白龍ビル 205
電話番号 090-8567-4121(担当者直通)

事例等 参考資料



大樹くん 高校生

母：知的障害（幼稚園生レベルのFIQ）

兄：知的障害（幼稚園生レベルのFIQ）

小学生の頃から、学校の先生や周りの大人から「お前がしっかりしないと！」と言われ、一人で頑張り続けてきました。その結果、心が疲れ果ててしまいました。大人を憎み、大人を見ると大暴れして攻撃を繰り返していました。それでも、このご家庭はお母さんの愛情で強く結ばれていたご家庭でした。お弁当を作れないお母さんは、学校給食がない日は卵焼きを一生懸命作って大樹くんを持たせました。小学校高学年から中学校は不登校。それでも頑張って勉強して高校進学。高校進学を機に大樹くんの健全育成を目的に、母子分離を実施。現在は一人暮らしをして大学進学を目指して猛勉強中。

どんな時も私たちが信じ続けてくれた大樹くんです。



大樹くんが育ったご家庭。

足の踏み場也没有ありません。
現在は、ここにお母さんとお兄ちゃんが住んでいます。
どんなに家庭環境整備をしても、次の日には足の踏み
場がなくなってしまういます。

子どもたちの幸せを願って
過労で倒れても頑張っているお母さん。

子どもたちは生まれ変わっても、お母さんの子ども
に生まれたい。この家庭で育ちたいと願って
います。





寝室は床が
抜けている
ので布団を
敷き詰めて
います。
ここでネズ
ミが大量発
生しました。



居間は抜
けた床を
段ボール
で塞いで
います。

Mさん（本人）精神疾患、知的障害

父・母共に精神疾患、知的障害。弟は知的障害。

行政がどんなに生活保護を進めても、親せき等からの目を気にして頑張り続けたお父さん。心の糸が切れてしまいました。

生活費もなくなり強盗で逮捕。その後は精神的に追い詰められ希死念慮が強くなり、外出もできなくなりました。

本人は第一志望校に合格していましたが、経済的な理由で高校進学を諦めました。

将来の夢を聞いた時、

「前は夢もあったんだけどね。もう、将来に夢を見ることは諦めた。」

と話してくれました。

私は、子どもから、こんな悲しい言葉を聞いたことはありません。



めぐみさんと真空くん

母：知的障害。

弟：発達障がい、精神疾患、重度慢性疾患

生活保護受給家庭。多額の借金あり自己破産申請中。
とても過酷な生活環境の中、3月に新しい命が誕生しました。このご家庭にとって真空くんの誕生はたった一つの光でした。

真空くんはママのお腹にいる時に、重度の染色体異常で生まれても数日の命と宣告されていました。
それでもママは、真空くんが元気に生まれてきてくれることを信じました。

生まれて1ヶ月。真空くんは大好きなママの腕の中で息を引き取りました。
経済的な理由でお葬式もあげることが出来ずアウトリーチチーム、たくさんの方のご協力を頂き、真空くんの旅立ちを見送ることが出来ました。



生きる力



もう、何年も前の話になります。

14歳の女の子を担当しました。

その子は、継父からの性虐待を受けていました。

そのことに気づいた母からは身体的虐待を受けました。

何度も何度も面談をし、その子の意思を確認し福島県から何百キロも離れた地への移送が決定しました。

14歳の女の子がたった一人で、それでも新たな地での希望に溢れた生活を夢見て出発しました。

それから程なくして、彼女から毎日のように電話が来ました。

淋しい。誰も頼れる人がいない。福島に帰りたいた。

泣きながら訴えてきました。

あれ程までに傷つけられても、母のもとに帰りたいたと泣きました。

2年が経過したある日、施設から電話がありました。

彼女がいなくなった。と。

彼女から、私の職場に連絡が入りました。

彼女は、淋しさのあまり、福島県に戻ってきてしまっていたのです。

私は彼女に会いませんでした。会ってしまうことは無責任だと、あの時の

私が考えた精一杯の応えでした。

「山下さんに会いたい。」それが彼女の最後の言葉でした。

彼女の16年間という人生の想い。

生きる力を育むことの出来なかった後悔。

様々な想いを抱え、日々、私たちは子どもたちのもとへと向かいます。

ご清聴 ありがとうございます。